

---

# 似て非なる者

木立久美子

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

似て非なる者

### 【Nコード】

N8498C

### 【作者名】

木立久美子

### 【あらすじ】

捏造未来設定。サブタイトルは「綱吉の苦惱」ボス、負けないで！〜」です。綱吉が可哀相です。少々やさぐれてます。雲と霧が好き勝手にやっついていて、話に山も落ちもございません。そのくせダラダラと長いお話なので、お暇な方だけお読み下さい。

似て非なる者

ボンゴレフアミリー10代目ボス、沢田綱吉は悩んでいた。

いや、彼の場合は毎日がトラブルの連続であるから、こうして自分ではどうしようもない問題や悩みを頭に抱え込むことも、そう珍しくはなかったのだけれど。でも、だからこそその苦しみとか、やりきれなさとか、無力感、頭痛を伴う苦悩やもろもろ…それらは当たり前のようにあるわけで。

それなのに、ちよつとでも休みたいとか俺もう無理だよとかの弱音を吐こうものなら、例の真つ黒スーツに身を包んだ自分より一回り近く年下の家庭教師から、容赦ない蹴り、パンチ、はたまた銃弾の数々が浴びせられてくるのだから、まったく血も涙もあつたもんじゃない。

人生楽ありや苦もあるさ、と誰かは歌っていたけれど、なんだから自分の場合は後者の「苦」ばかりが降りそそいでいるような気がする。

マフィアのボスになったことを、後悔なんかしていないけれど、でも自分にはもつと別の人生が、もつと他の歩み方があつたはずなのだと思うと、ときどき目頭が熱くなるのだ。

お人好しで、ツッコミ体質で、揃いも揃って濃い奴らばかりなファミリーの中では、唯一の常識人とも言うべき存在。どれだけ平穏を愛そうとも手は届かず、逆にハプニングやらトラブルやら奇想天外大事件やらに心の底から愛されている自分のことが、綱吉は憎らしいやら情けないやらで、疲労して擦り切れまくつた心はもはや諦めの領域に達している。

ああ、でも。

それでも、やはり我慢の限界というのはあるもので。

「雲雀さん…骸…」

震えた声、ついでに握つた拳もふるふると震わせながら、綱吉は

叫んだ。

「なんで、もつと仲良くできないんですか！」

答えは返ってこない。

2人とも、綱吉の悲痛な言葉など素知らぬ顔だ。

ボンゴレファミリー雲の守護者、雲雀恭弥。

同じくボンゴレファミリー霧の守護者、六道骸。

守護者の中でも1、2を争う実力者である彼らは、マフィアという集団の中において一種異様な存在でもあった。

雲と霧。

似て非なる者。

非なる者ながら、酷似する強さ。

同族嫌悪とでも言うのだろうか、雲雀恭弥と六道骸は、とても仲が悪かった。

2人が顔を合わせる度に乱闘騒ぎになり、それが屋敷内ならば家具やら壁やら一切合切を破壊し尽くしてしまうほどに、そりゃあもう、とんでもなく仲が悪かった。

## 似て非なる者

うなる改造トンファー、舞い踊る三叉槍。

今日も今日とて、雲と霧の大乱闘は始まった。幹部会議で、2人を同時に屋敷へと呼び寄せてしまったのが、綱吉にとっての運の尽き。扉の前ではったりと鉢合わせてしまった2人はその直後にシャキンガシャンと武器を取り出し、周囲の人間が止める間もなく斬り結んだのであった。ああ、せめて2人が顔を合わせたのが会議室内だったなら良かったのに。さすがの2人も、自分以外の守護者が全員揃っている中で、あそこまで大暴れなどしなかつただろう。多分、自分の運の悪さと間抜けさに、綱吉は心の中でだばだばと涙を流す。ボスという立場ゆえ、表だって泣き言を吐けないのは非常にづらい。とにかくもう、大変どころの騒ぎじゃなかつただ。

下つ端たちの悲鳴。逃げ遅れた者は巻き込まれ、やれ怪我人だ、やれ重傷者だと、一時期アジトは混乱した。

ただでさえ鬼のような戦闘能力を誇る2人なのに、そこへ地獄道やら畜生道で召還された蛇やら隣町ボーイズの加勢（「骸さん手伝いまふ！」）やら某ダイナマイト野郎の仲裁という名の乱入（「てめーら10代目を困らせんじゃねえ！」）やらが追加されれば、もう辺り一帯は地獄絵図となる。窓ガラスは割れ、屋敷内はめっちゃくちゃだ。

こういうときに限って家庭教師は「ボスなら何とかしろ」の一言を残して奥へ引っ込んでしまっし、仕方なく綱吉はバジルに借りた大量の死ぬ気丸を一気飲みして、山本や了平の手も借り何とかその場を収めたのだった。

それから、数日後。

荒らされた屋敷内もきれいに片付き、一息ついたドン・ボンゴレこと綱吉は、この騒ぎを起こした張本人である守護者2名を呼び出した。ただし、また前回の二の舞になつては堪らないから、勿論それぞれ別々に。

「いらつしゃい、雲雀さん」

最初に綱吉の部屋へやってきたのは、孤高の浮き雲こと雲雀恭弥であった。

学生時代よりは大分ましになったとはいえ、彼の纏っている威圧的なオーラや他人を寄せ付けけない鋭い目には、いまだに順応できない綱吉である。

とりあえず向かいのソファに座ってもらい、彼の好むストレートの紅茶に一滴ほどブランデーを垂らして差し出した。2人とも、暫く無言でその味と香りを楽しむ。

内心は緊張と僅かな恐怖でガチガチになっていたのだが、自分はボスであるというなけなしの自信が背を押した。あくまでも何気ない会話を装い、綱吉は切り出す。

「ねえ、雲雀さん。わかってますよね」

「何をだい？」

「俺が、あなたを呼んだ理由です」

沈黙。

かちゃん、とティーカップを置いて、雲雀は無表情のまま相手を見つめ返した。

怒らせたかな、と綱吉が思わず身構えると、予想に反して雲雀はぶいっと顔を背けてしまう。威圧的な笑みを見せるでもなく、トンファーを取り出すでもなく、ただ不機嫌そうに綱吉から目をそらしたのだ。表情そのものにはあまり変化が無くて、長年ファミリーとして彼と行動を共にした綱吉だからこそ見分けられる、彼の感情の揺らめきだった。

「雲雀：さん？」

意外な反応に綱吉がきょとんとしていると、やがて雲雀は普段の無機質で冷たい表情を取り戻し、非常に淡々とした声でこう告げた。

「僕は群れるのが嫌いだ」

「…」

ええ、存じ上げておりますとも。

綱吉は溜め息を吐き出し、がつくりと肩を落とした。謝罪など期待していなかったし、今更されても困るだけだが、こうもきっぱり言い切られると溜め息のひとつやふたつ零したくなる。

雲雀の一匹狼気質は、重々承知の上だ。マフィアやら裏社会やらの世界に彼を引き込んでしまった原因は自分なのだし、なんだかんだで守護者として戦ってくれる彼（本人にその気があるかどうかはまた別の話だけれど）に、綱吉は心から感謝している。

けれど、だからといって毎回の乱闘騒ぎに目を瞑れるのかと言われると、それはそれでまた別の問題で。

確かに骸が過去に行ったことは許し難い事実だし、それについて雲雀が怒っているのも非常によく理解できる。侮辱されたと、ひど

い屈辱を受けたのだと、根に持つのも道理だった。高潔というか、とにかくプライドの高い人なのだ、雲雀恭弥という男は。

「群れてほしいなんて、言ってますせん。ただ、もう少し穏便に事を運ぶ方法とか…他にないんでしょうか」

「穏便？」

「…無理ですか、やっぱり」

「解ってるなら訊かないですよ」

それきり黙り込む雲雀の表情は、ひどく冷ややかだった。

これ以上は何を言っても無駄だなと、半ば予想していたことはいえ、綱吉は重い溜め息を吐かずにはいられない。ああ、今日で何回目だ、これ。

「でも、せめて、屋敷内を破壊することだけは勘弁してください」

「…」

「雲雀さん…」

がたん。無表情のまま立ち上がった彼は、「紅茶ごちそうさま」の一言を残して、さっさと部屋を出て行くこととする。綱吉の都合など知ったことかと、呼び止める声さえ無視して、彼はスタスタと歩いていった。

「頼みますから、今度は骸と会ってもケンカしないでくださいね！」

最後に叫んだ言葉は届いたであろうか。無情にも、ばたと扉は閉められる。

紅茶のカップを置いて、あーあと綱吉は額を押さえた。

骸を許せとは言わない。でも、自分たちは一応ファミリーなことから、せめて乱闘騒ぎだけでも控えるようにしてほしかった。出来ることならば山本や了平のように…いや、あそこまでフレンドリーになられても逆に不気味だが、とにかく今のような状態では綱吉の身が保たないのである。

「胃薬…」

がさごそと取り出した白い錠剤を、綱吉は口に放り込んで飲み込む。

さあ、頑張れ俺。もう1人。

気合いを入れた彼の耳に、コンコン、と丁寧なノック音が届いた。

「お呼びで？ ボス」

「…いらっしやい、骸」

扉を開いて現れたのは、まやかしの幻影こと六道骸。

相も変わらぬ穏やかな声音、まるで彫像のように整った笑顔。そして、その裏に潜んだ背中合わせの狂気と野心。

出会ったばかりの頃は綱吉も彼を恐れていたが、仲間となった今はそうでもない。もちろん完全に信じたわけではなかったし、骸自身もマフィアから信頼されることなど望んじやいなかったけれど、でもそんな関係も悪くはないかなと達観した考えが持てるようになった。自分も凶太くなったものだ。と綱吉は少し感心する。もちろん虚しさもあつたけれど。

「髑髏たちは？」

「今日は1人で来ましたよ」

「そう」

「だって、用があるのは僕だけなんでしょう？」

「…わかつてるんじゃないか」

一部の、否、大半のファミリーから畏怖される彼は、今日もまた胡散臭さ全開で綱吉の傍へやってきた。あれだけの騒ぎを起こしておきながら、そりゃあもう、憎らしくなるくらい涼しい顔をしている。綱吉は殴り飛ばしたい感情を必死で抑えた。どうせ、殴ろうとしたって当たりやしないのだ。この男なら鼻で笑って、軽く避けてしまふに違いなかった。

「ミルクと砂糖、いれるよね」

「ありがとうございます」

雲雀のときと同じく向かいのソファに座らせ紅茶を勧めた。彼は甘党だから、砂糖はたっぷりと用意する。しかし、なぜか骸はそれに手を付けず、いぶかしがる綱吉に向かって優雅に目を細め、こう言った。

「僕は謝りませんよ」

「……」

「先手必勝。」

にっこり笑顔で言い放たれたその言葉に、綱吉はこめかみを押さえて低く呻いた。

……ああ、頭痛がする。胃痛に頭痛におまけの心痛。いつかストレス障害で入院なんてことになったら入院費は全てこいつらの給料から差し引いてやろうと綱吉は心に決める。ああもう本当に誰かお願いだからどうかして。倒れる日は多分もうそんなに遠くない。そう確信できてしまう自分に涙が出そうだ。なにが超直感だよこんなときには全然役に立ちやしないじゃないか。むしろ分かりたくないことまで分かっちゃってしまうこの能力にいいかげん嫌気が差してくるよ全くもうブラッド・オブ・ボンゴレのくそつたれ。

「ご先祖様に対する許し難い悪口雑言を、ぶつくさと心の中で呟く。そんな綱吉を見て口元の笑みをいつそう深くすると、骸はさも面白そうな口調で続けた。

「先にケンカを売ってきたのは彼です。僕は、それに応じたまでのこと。責められるのは筋違いだと思っただけです」

「お前らの勝手なケンカで俺や他ファミリーが被害を受けるのも筋違いだけだな！」

相手と同じように大量の砂糖を放り込んだミルクティーを、綱吉はイライラしながらかき混ぜ、悔しまぎれに一気飲みした。雲雀のときも飲んだからもう2杯目だとかカフェインの取りすぎは体に良くないだとか思っただけで、そんなことよりも今は目の前のこの男が憎らしくてたまらない。

「とにかく、雲雀さんもお前も減給処分！」

「痛くも痒くもありません」

いけしゃあしゃあと答える相手を見て、綱吉は今ここに死ぬ気丸がなくて良かったと心から思う。

もしあったら、この部屋は戦場と化していたに違いないのだから。

霧と雲は似て非なる者。

非なる者ながら酷似する、その強さとその残虐性。

ゆらゆら揺らめき変化し続ける彼らは、ある意味、同族と呼べるのかもしれない。

だからこそ、互いを忌み嫌うのだ。

「ドン・ボンゴレ！ 大変です、雲と霧がまた乱闘を始めました！」  
「…またかよ…」

今日もまた、大混乱に陥るアジトを綱吉が収める。

頑張れ綱吉。

負けるな綱吉。

大空があるからこそ、雲と霧は漂うことが出来るのだから。

似て非なる者

(後書き)

オチるものか。巡るばかりさ！

似て非なる者

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8498c/>

---

似て非なる者

2009年6月8日03時32分発行